

「ASK?映像祭2022」は、チラシをつくっているときにコロナ第7波が到来し、感染者が急増したためループでの無料上映になった。ループ上映も今年で3回目である。来年は通常の上映ができるだろうか。一方、今年は2つのプログラムに分けての上映となった。とくに応募数が増えたわけではないので、応募作品が充実したのである。かつてわたしは、ASK?映像祭を「日本でいちばん小さな映像のコンペティション」といったが、同時に「日本でいちばんレベルの高い映像のコンペティション」ともいつてきた。優秀な作品が多く集まるのがASK?映像祭の特徴なのだ。

大賞は川畑那奈の『Weather Map』に決定した。実をいうとわたしは、金子勲矩の『Magnified City』を大賞と考えていたのだが、久里洋二さんが推薦した『WEATHER MAP』が大賞に選ばれた。近年のASK?映像祭は久里さんが推す作品がそのまま大賞になる傾向がある。

しかし、川畑那奈が大賞になったことに不満があるわけではまったくない。川畑は、2020年に『ONE WORLD』がASK?賞に選ばれ、わたしも作品を評価していた。『WEATHER MAP』ではよりスケールが大きくなっており、大賞にふさわしい。風景に近づいたり遠ざかったりしながら進めていくスタイルはこの作家に独自なものだ。台風の到来を擬人化したような不思議なイメージの作品で、アプローチも独特であった。

結局、金子勲矩の『Magnified City』はASK?賞に選ばれた。今年は手描きの感触を活かしたアニメーションにすぐれた作品が多かったが、この作品もそうである。主人公の虫眼鏡人間、誰もいない映画館、フィルムに手書きする映写機人間など、アナログ的な道具立てがノスタルジックな魅力となっている。アナログメディアについていろいろ考えさせるところもあって、わたしは奥が深い作品だと感じた。

西村智弘賞には、酒井日花の『痼 empathy』を選んだ。胸にしこりができて手術をするという作者自身のプライベートな出来事をうまく作品にしている。自分の心情を言葉ではなく、手描きのアニメーションの質感や動きで視覚的に表現しているところがこの作品のすごいところである。女性の心情をうまく表現している点では、久里洋二賞に選ばれた多田あかりの『#』も同様であった。一人暮らしの部屋で真夜中にSNSを操作する若い女性の孤独を、アニメーションのイメージによって視覚化することに成功している。

相内啓司は大ベテランの作家で、2018年に『Hello friend - schizophrenic view』が入選している。『REM れむ - The waves of endless dreams』は、夢のなかの出来事を描いた作品で、シュールなイメージが次々とあらわれる。相内は初期に幻想的なアニメーションをつくっていたから、原点回帰であるかもしれない。まちだりなの『蟻たちの塔』は、日常と幻想が入り混じるような独自の世界が構築されている。手描きの画面がいい味を出していた。

山森正志の『世界で一番すばらしい俺』は、高校生の生活や事件を短歌によって描いたドラマで、スタイルの独創性を評価したい。志波景介の『これかもきつと言えない』は、女子高生の恋心を描いた小品で、シンプルな構成に好感がもてた。

ケドモンの『マンガガールズ』は、漫画を描くのが好きな女子高生をユーモラスに描いたアニメーション。途中でいきなり実写になるのが効果的でおもしろかった。JIANS YIFANの『まいど!』も最後に実写になるアニメーションである。ノスタルジックな日常のなかで人々の行為が反復される作品で、コンセプトがおもしろいと思った。

しょーたは、2018年に『がんばれ! よんぺーくん』で大賞を受賞している。新作の『GOLD TIGER』は、インディーズバンドのミュージックビデオで、ユーラスで破天荒なスタイルは相変わらずである。昨年3作品が入選した橋本誠史の『はしもとロボットアニメ』も、相変わらず破天荒なアニメーションである。タコさんウイナーというオチ(?)に向かっていっきに駆け抜けていく勢いがすごい。

村田茜の『口をひらく』は、日本画の岩絵具を使ったアニメーションで、岩絵具の質感が独自の魅力をつくっていた。倉澤紘己もマチエールを際立たせたアニメーションをつくる作家であ

る。『プリンがつぶれるまで』では子供の不安を絵画のような画質で表現し、『Intercom』は不安のイメージを抽象的な画面で表現していた。

kinoMANUALはポーランドの作家である。『ZEN for TV』は、モノクロのグラフィッカルなアニメーションで、単純化されたミニマルな動きが独特のユーモアを醸し出していた。片山風花の『よもやま短編集』は、カフェの日常がシュールに描かれていて楽しい作品である。

菊谷達史の『うつくしき動物たち』は、壁に直接描いたアニメーションで、廃墟の壁と記憶のイメージがうまく合っていた。新海大吾の『しとすと』は、雨の日の日常を海底のイメージに重ねたところがおもしろい。黒澤幸代の『庭の詩学』は、線画によるやさしいイメージと立体アニメーションの組み合わせが意外な効果を出していた。